

村上春樹
佐々木マキ



ふしぎな図書館

村上春樹
佐々木マキ

講談社

1

図書館はいつもよりずっと、しんとしていた。

ぼくはそのとき新しい革靴かわぐつをはいていたので、灰色のリノリウムの床を歩くと、こつんこつんという硬く、かわいた音がした。なんだか自分の足音じゃないみたいだ。新しい革靴をはくと、足音になれるまでに、けっこう時間がかかる。

貸しだしコーナーには、見たことのない女の人が座って、ぶあつい本を読んでいた。右のはばがとても広い本だ。右の目で右側のページを読んで、左の目で左側のページを読んでいるみたいに見えた。

「すみません」とぼくは声をかけた。

彼女はばたんという大きな音をたてて、本を机の上に置き、顔をあげてこちらを見た。「本を返しにきました」とぼくは言って、抱えていた二冊の本をカウンターのの上に置き

た。一冊は『潜水艦^{せんすいかん}の作り方』、もう一冊は『ある羊飼いの回想』だった。

彼女は本の表紙をめくって、貸しだし期限を調べた。もちろん期限内だ。ぼくは日にちや時間の約束はきちんとまもる。母にいつもそうするように言われているからだ。羊飼いかも同じだ。羊飼いが時間をまもらないと、羊たちはとんでもなくとりみだしてしまうことになるから。

彼女は貸しだしカードに「返却^{へんきやく}」のスタンプをいきおいよく押し、それからまた読書にとりかかった。

「本を探しているんですが」とぼくは言った。

「階段をおりて右」とその女の人は顔もあげずに言った。「まっすぐ進んで、107号室」



2

長い階段をおりて右に曲がり、うす暗い廊下をまっすぐ進んでいくと、たしかに107という番号札がかかったドアがあった。何度もこの図書館にきているけれど、地階があったな



なんて初耳だ。^{はつみみ}

ごくふつうにドアをノックしただけなのに、バットで地獄の門でもたたいたみたいなの、不吉な音があたりにひびきわたった。ぼくはそのままうしろをむいて、逃げて帰りたくなつた。でも逃げ帰らなかつた。そういう風にしつけられているからだ。いったんノックをしたら、返事を待たなくてはならない。

中から「入りなさい」という声が聞こえた。低い、でもよくとおる声だった。ぼくはドアを開けた。

部屋の中には小さな古い机があり、そのうしろには小柄な老人が座っていた。顔にはまるでハエがたかつたみたいに、小さな黒いシミがついていた。老人ははげて、レンズのぶあつい眼鏡をかけていた。どことなくすすきりとしなないはげ方だった。白髪^{しろが}が、まるではげしい山火事のとみたいに、ちりちりにねじれて、頭のわきにはりついていてた。

「ようこそ、坊ちゃん」と老人は言った。「なにかご用で？」

「本をさがしているんですが」とぼくは自信のない声で言った。「でも、おいそがしそうですね。またこんどに……」

「いやいや、いそがしいことなんぞありますかな」と老人は言った。「それが私の仕事でありますからには、どんな本でもおさがししましょうぞ」

ずいぶん妙な話し方だな、とぼくは思った。顔だつて、そのしゃべり方に負けずおとらず不^ぶ気^き味^みだ。耳に長い毛が何本かはえている。あごの皮^ひ膚^ふは、まるでやぶれた風船みたいなかたちで、下に垂^たれさがっている。

「いかような本をおさがしになつておられますかな、坊ちゃん？」

「オスマントルコ帝国の税金のあつめ方について知りたいんです」とぼくは言った。

老人の目がきらりと光った。「なあるほど、オスマントルコ帝国の税金のあつめ方、ですか。それは、ああ、なかなか興味ぶかい」